2020年11月15日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書13章31～35節

説教題：新しい戒め

「百万人の福音」が「差別とキリスト教」という特集を組んでいました。アメリカでは人種差別に反対するデモが起こっています。キング牧師が「私には夢がある」という演説をしたのが1963年、公民権法が成立したのが1964年です。それから56年になりますが、人種差別の根深さを思わされます。ところで、キング牧師の運動がどうして成果を上げることが出来たのか。「私には夢がある」のメッセージで彼はこう言っています。「私には、将来いつか、幼い黒人の子供達が幼い白人の子供達と手に手を取って兄弟姉妹となり得る日が来る、という夢がある」。彼は、黒人に差別と暴力を為す白人を憎んだのではないのです。「やがては愛し合うようになる人達」として捉えて、既に愛していたのです。その姿勢がやがて白人の心さえ変えて行くのです。愛が悪に勝利して行くのです。教えられます。

さて、前回の箇所で、イスカリオテのユダが最後の晩餐の席から出て行きました。彼はそのまま大祭司の所へ行って、イエス様逮捕の手引きをすることになります。イエス様の逮捕が秒読みに入ったのです。そこでイエス様は、ここから弟子達に向かって「別れの説教」をされます。今日の箇所はその初めの部分です。中に「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(34)という有名な言葉を含みますが、全体としては「キリスト者の生き方」について教えます。自分の弱さを覚えますので、自分自身に語るようなつもりで、2つのことをお話しします。

1：「神に忠実・従順であること」

イエス様はまず「今こそ人の子(イエス)は栄光を受けました」(31)と言われます。「ヨハネ福音書」がイエス様に関して「栄光」と言う時、それは十字架を意味します。イエスは「栄光を受けました」と過去形で言っておられますから、イエス様の中では、既に十字架が始まっていたのです。さらにイエス様は「神は人の子によって栄光をお受けになりました」(31)と言われます。これは「神はイエスの十字架によって栄光を受けた」と言い換えることが出来ます。私達は、十字架がイエス様だけの業ではなく、イエス様を送られた神様の業であることも知っています。なぜ私達は神様を愛するのでしょうか。神様が全地全能で、天地万物を造られた方だからでしょうか。そうではないと思うのです。「旧約」の人々は、天地万物を造られた神を、愛するというより、むしろ恐れたのです。彼らの目に映る神様は、裁きの神でした。しかしイエス様の十字架を通して分かったのは、神は、裁く方ではなく、赦す方であり、弱さを責める方ではなく、憐れむ方であり、愛される何の資格もない者を、宝物のように愛される方である、ということです。その神の愛が分かったから、神の赦しを経験したから、私達は神の愛を感謝し、讃えるのではないでしょうか。そして神は、私達のような者が、十字架の故に神様を慕い、「ありがとうございます」と言うことを、ご自分の栄光だと言われるのです。だからイエス様は「神

は十字架によって栄光を受けた」と言われたのです。

十字架が神様に栄光を与えました。しかしイエス様は、ゲッセマネで「できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」(マタイ 26:39)と祈られました。人としてのイエス様には、私達の罪を背負って死ぬということが、どれほど恐ろしいことか、ご存知だったのです。にも拘わらず、なぜ十字架は立ったのか。それは、イエス様が「しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのように、なさってください」(マタイ 26:39)と祈り、最後まで神に忠実であろうとされたからです。イエス様の忠実が、従順が、神に栄光を与えた、ということになります。

「ウエストミンスター信仰問答」という問答書は「人の…目的は…神の栄光を表し、永遠に神を喜ぶこと」だと宣言します。私達にとって、神の栄光を表すことこそ大事な生き方だということでしょう。神の栄光を表す。色々な形があるでしょう。ある人は、喜びを生きること、感謝を生きることだと言います。それもあるでしょう。「敵をもてなす」という話では、自分達の村を襲った兵隊の隊長が教会に来た時、村人が「神があなたを愛しているので、私達も歓迎します。よくいらっしゃいました」と歓迎した。隊長は「神を知るということはこの世で一番素晴らしいことだ」と言った。

神の栄光が現れた。しかし、ここででは、そのカギは、イエスが神に従順であられたように、私達も神(御言葉)に従順であることだと思うのです。

イエス様は 32 節で「神が、人の子(イエス)によって栄光をお受けになったのであれば、神も…人の子(イエス)に栄光をお与えになります」と言われました。十字架もイエス様の栄光ですが、さらに大きな栄光である復活、昇天のことを言っておられると思います。十字架は、復活、昇天に繋がるのです。「天路歴程」の中で、主人公が天の都に辿り着いた時、都の門にはこう書いてありました。「王を喜ばせるために生きてきた人々は幸いである。彼らは、この門を通って天の都に入ることができる」。私達の小さな忠実は、素晴らしい栄光に繋がっているのです。

忠実、従順、特別なことではないと思います。カナダでお会いした高齢の姉妹がおられます。ご高齢になられてからも、色々な悲しみやご苦労があったのです。しかし、ただ神様を真っ直ぐに見上げ、コツコツと聖書を読み、祈りを捧げ、集会に黙々と参加しておられました。私はその姉妹のこと思う度に「忠実という言葉が歩いておられる」ように思ったものでした。もう天国に帰られましたが、天国で「よくやった。良い忠実なしもべだ」(マタイ 25:21)と声をかけられ、大きな祝福を経験しておられることを疑うことが出来ません。何があっても、神の愛に信頼し、神の下さる状況を感謝して受け入れ、神に期待し、神と共に歩んで行く、それが忠実ということではないでしょうか。そんな信仰でありたいと願うことです。

2 :「互いに愛し合うこと」

イエス様は「わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない」(33)と言われます。別れの言葉です。そして別れに当たって「これだけは言い残しておきたい」と、34 節の「あなた

がたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい…」(34)の言葉を語られました。イエスは「新しい戒めを与える」と言われますが、しかし「互いに愛し合いなさい」という戒め自体は「旧約」の中にも見られます。「レビ記 19 章 18 節」に「あなたのとなり人をあなた自身のように愛しなさい」(レビ 19:18)とあります。なぜ「新しい戒め」なのか、何が新しいのでしょうか。

イエス様はここで「わたしがあなたがたを愛したように」と言われます。つまり「イエス様が弟子達を愛された、そのイエス様の愛を映し出すような愛し方で隣人を愛する、お互いに愛し合う」という、その「愛し方」がこの戒めを新しい戒めにしているのです。では、イエス様が弟子達を愛された愛し方とは、どのような愛し方でしょうか。2 つだけ申し上げると、1 つ、それは「ありのままを愛する愛」でした。イエスは 3 年間、弟子達と寝食を共にされました。そうすると、弱い部分、悪い部分も出て来て、イエス様もため息をつきたくなることがあられたのではないでしょうか。しかしイエス様の弟子達に対する愛は変わらない。イエスが膝を屈めて足を洗われたその弟子達は、嫌な面、弱い面を色々と持っている人達でした。その弟子達を、イエス様はありのまま愛されたのです。ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」の中で教会の長老が言うそうです。「皆さん、人間の罪を恐れてはならない。罪あるがままの人間を愛しなさい。なぜなら、これはすでに神の愛に近い」。もう 1 つは「赦しをもって愛する愛」でした。イエスはペテロに言われます。「シモン、あなたは私を裏切るけれど、私は、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈ったよ。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟達を力づけてあげなさい」(ルカ 22:31～32 意訳)。すぐそこに裏切りを見ながら、イエス様は既に赦しておられるのです。そしてペテロのために祈っておられるのです。彼らは、最後まで無理解でした。最後は逃げました。しかしイエス様は、彼らを赦しながら愛されました。十字架の最初の言葉も「父よ。彼らをお赦し下さい」(ルカ 23:34)でした。弟子達がそのことを聞いた時、彼らはイエス様のことが分かり始めるのです。イエス様の愛はそのような愛でした。そのような愛で「あなた達もお互いに愛し合いなさい」と言われたのではないでしょうか。難しいです。だからそこには励ましもありました。イエスは 14 章 21 でこう言っておられます。「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人は…わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします」(14:21)。イエスの言われた愛を行う時、私達はイエス様にお会い出来る、イエス様が助けて下さるということです。主の助けがある、そのこともこの戒めを「新しい戒め」にしているのです。

イエス様は 35 節で「もし互いの間に(そのような)愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです」(35)と言われました。初代教会の時代、キリスト者でない人々が、あるいは教会を迫害している人々が、その愛を認めないわけにはいかなかったそうです。ある迫害者は言いました。「彼らは、ほとんど知り合う前から愛し合っている」。初代教会は、イエス様が言われた愛に生きたのです。そして、迫害の中、彼らはその愛で世に打ち勝って行くのです。

私達も、イエスが教えて下さった愛に生きる者になりたいと願わされます。しかし、そのために大事なことがあります。お子さんの不登校で大きな戦いを経験されたお母さんの証しを読んだことがあります。お母さんは、自分の子供が不登校だという事実をどうしても受け入れることが出来なかったのです。そして「子供を何とかしなければ」と思うと、愛するというより、自分の気持ちを押し付けるような格好になっていたのです。その中で自分の弱さや醜さも嫌というほど見せられるのですが、しかしある時、そんな自分を神様が受け入れて下さっている、という思いを持てた時に、自分を、自分の状況を、受け入れることが出来て、そして子供に対する思いが「この子を何とかしなくちゃ」から「何かしてあげたい、私に何がして上げられるだろうか」に変ったと書いておられました。そこから問題の解決が始まるのです。愛を行うために、神様に赦され、愛されている自分を確認すること、それが大切なのではないかと思わされます。

初めにキング牧師の話をしましたが、彼より 100 年前に奴隷解放を行ったリンカーンについて次のような話があります。アメリカ合衆国から南部諸州が離反して、南北戦争が起こりましたが、北軍が勝った時、ある人が北軍の指導者リンカーン大統領に聞きました。南軍(南部)の人々をどうしますか。リンカーンは答えました。「私は、離反など全くなかったかのように彼らを扱うつもりです。なぜなら神ご自身が私達をそのように扱われたのですから」。イエス様の話された「放蕩息子」の話を引き合いにこう言って、北部と南部の亀裂の傷を癒して行ったのです。イエス様の愛に生きることは、私達の小さな生活にも祝福をもたらすに違いありません。

終わりに

今日、信仰者の生き方として 2 つのことを申し上げました。「神に忠実であること」「イエスの愛に生きること」、実際、難しいでしょう。しかし、イエス様の、聖霊の助けがあります。信仰の歩みを進めて行きましょう。